

館内に新たな カフェがオープン

2025年8月末、新潟市美術館内に「スープとお茶〈ひとさじ喫茶室〉」がオープンします。

旬の素材を使ったスープやお惣菜のお食事プレートをはじめ、季節のおやつやフランス伝統菓子を中心に、こころも体もよろこぶメニューをご用意いたします。展示鑑賞の前後や、ふらりと立ち寄った日の休憩に、美術館の空気感とつながるような、豊かなひとときをお届けします。また、店内では、地域の作家による器や雑貨の展示販売や、ワークショップなども行います。新潟の恵みを感じる食材にもこだわりながら、五感で味わう「まちの喫茶室」を目指します。美術館やご近所を訪れる皆さまの日常に、そっと寄り添う場所になりますように。皆様のお越しをお待ちしております。

(ひとさじ喫茶室 小林 萌)



営業日時は美術館に準じます。ラストオーダーは閉館1時間前。
Instagram @hitosaji.tearoom

編集後記

これまで36年にわたって制作されてきた『WAVE 新潟市美術館だより』は、開館40周年を迎え3度目のリニューアルを果たしました。タイトルロゴや判型を一新し、内容面ではより読み物としての性格を強める媒体を目指します。初めての試みとして、当館の活動に長くご支援をいただいている、前川建築設計事務所の濱氏、美術評論家の原田氏のお二方から寄稿をいただきました。心より感謝を申し上げます。これから本誌を通して、さまざまな視点から美術館の活動を読者のみなさまにお届けしてまいります。

(学芸員 児矢野 あゆみ)

表紙の作品

《新潟市美術館》 1985年竣工

前川國男 (1905–1986)

新潟市美術館の建物は、高さの異なる複数の「箱」を組み合わせた構成です。直上から見下ろすと、建物内外に曲がり角が多いことも分かります。建物というのは、要するに壁と屋根のことですが、それらの間のすき間=空間でもあります。建築家・前川國男は、その空間の心地良さに心を砕きました。言い換えると、「エレベーション」(立面)よりも、「プラン」(平面)の建築家だったのです。プラン重視の建物では、曲がり角が多くなります。通路の角を曲がると、天井が不意に高くなり、大きな窓から中庭が見える。このような場面転換を、建築の分野で「シーケンス」と呼びます。前川はその名手でもありました。

2024年10月から行われた改修工事は、前川の遺作である当館の機能維持・向上、そして長寿命化を主眼として行われました。たとえば、外壁を覆うオリーブグリーンのタイル約13万枚、その全数を目視・打診(小さなハンマーで軽く叩く)で点検し、劣化が確認されたタイルは補修・交換しています。そのほか空調・照明設備の更新など、工事は極めて多岐にわたりました。再開館する今年、当館は開館40周年を迎えます。

(学芸員 藤井 素彦)



ISSN 2760-2397

『WAVE 新潟市美術館だより』36号
編集・発行 新潟市美術館、2025年8月30日

新潟市美術館

Niigata City Art Museum

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9

TEL:025-223-1622 FAX:025-228-3051



WAVE

no.36
2025

新潟市美術館だより



開館40周年記念

・原田 光「新潟市美術館と私」

・濱 興治「新潟市美術館 ― 43年間を振り返って」

・滝沢 恭司「新潟ゆかりの自由人 版画家谷中安規のこと」

・新たな学芸員が仲間入り

・開館40周年記念! 自主企画展のご案内

・館内に新たなカフェがオープン／表紙の作品

新潟市美術館と私

原田 光（美術評論家）

早稲田大学第一文学部仏文科卒業。美術出版社勤務を経て、神奈川県立近代美術館に勤務。企画展示に「没後60年 長谷川利行展」(2000年)ほか。その後、横須賀美術館開設準備室に勤務し、2010年岩手県立美術館館長に就任(2015年度まで)。のち、戦没画学生慰霊美術館 無言館をお手伝い。著書に『鳥海青児 絵を耕す』(2015年)ほか。2012年度から2024年度まで新潟市美術館及び新潟市新津美術館美術資料選定委員を務めた。

10年間ばかり、新潟市美術館の収集委員をつとめ、この3月で、それを終えました。収集委員というのを、あまり聞いたことのない存在だと思われる人は多いでしょう。これは、購入や寄贈によって収集する作品が、その美術館にとって、妥当かどうかを、外部の委員として、判断し決定する役目をおっています。通常、年に1度開催し、ここでは、委員は6人以内で組織され、だいたい、日本画、油絵、工芸、現代美術などに、専門的な知識をそなえた者があたることになります。

と、書いてみて、はたして、僕に、そういう知識があったかどうか、むしろ、それを疑いながら、つとめてきた気がしています。もっと実際に言うと、収集の担当の学芸員に、これは、どういう作品ですかと聞き、どうして収集したいと考えるのですかと聞き、他にもいろいろと聞く、質問者であったように思えます。知らない作者の知らない作品と、はじめて対面して、そして、知りえるだけのことは、その学芸員から教わるというのが、こちらの役目のようになっておりました。

どこの公立美術館でも、もう長いこと、作品の収集予算のない状態が続いています。悪い状態です。購入はあきらめ、寄贈に頼って、収集をすすめることになります。すると、美術館が、ただの寄贈の受け皿になってしまいかねない危険が生じます。ですが、よいこともあります。市内や県内にあって、ひっそりと保存されていたり、忘れられていた作品が、寄贈によって、美術館にはいり、注目される場合です。ここには、こんなにもいい作家がおり、いい作品があったかと感じて、ここ新潟の、美術文化産出の奥行きの深さにも目が開く、収集委員として、何度も、そんな体験をえてきました。

もう30年以上も前ですが、新潟市の船会社の事務所を訪ねて、すごい数の油絵を見せていただいたことがあります。昭和初期に、プロレタリア美術運動をした画家たちが、戦後になって普通の風景や静物や人物を描いたのを、船会社の社長が買いとり、そっと生活援助してきたという経緯をもった作品たちでした。やがて、これらは

新潟市美術館に収集されました。感激しました。*

なんでもないふうに描かれた油絵の中に、新潟という土地の懐の深さをあじわいました。これが、美術館の常設展の中で、新潟だからその作品になるためには、しかし、何回も繰り返して、学芸員がトークをしないとしないかもしれません。最初に説得される者が僕という役割だった気もします。



*寄贈作品(小林力三コレクション)の一部
上 矢部友衛《麦ふみ》1946年
下 岡本唐貴《(津川の風景)》1942年

新潟市美術館—43年間を振り返って

濱 興治（前川建築設計事務所）

新潟市美術館の40年目の大規模改修工事は、1985年竣工から4回目にあたり、2025年7月に完成する。1995年には常設展示室の増改築、2005年は空調・照明設備改修、2015年に老朽化改修が行われてきた。私は前川國男が最晩年に設計した美術館竣工とその後4回の改修に携わることができた。この機会に前川先生のことや各工事を振り返ってみたいと思う。

指名コンペで選ばれた前川案は、美術館の空間構成と旧市内の堀を再現した公園が評価された。空間構成では入口から展示室までの動線は長く取られている。これにより展示室照度に目が順応することや高揚感を高める働きがある。展示室は個々の空間をずらしながら配置されていて、そのまま外観に表れている。前川先生は「建物は現代の技術では大きくできるが、人間には適正空間があり、その空間を繋いでいく方法が良いと思う」と語られていた。本館の空間構成そのものだと思った。設計はコンペを主導した高橋義明さんがチーフで5名の若手が担当した。設計開始時1982年の春に初めて美術館の敷地を訪れた。刑務所の跡地はコンクリートの塀が一部残っており、雑草が生えた砂地で荒涼としていた。日本海を見たくなり砂丘を上ると、晴天の中で幅の広い松林が数kmに及び、日本海が開ける景観に感銘した。

1983年夏、現場が始まり、前川先生のあいさつがあった。「100年もつ美術館を造ろう」という言葉が強く印象に残った。このころ先生は戦後の建築の寿命が短いことを憂え、建築の耐久性について語ることが多かった。打込タイルをよく用いる理由にもなっていた。新潟生まれの先生は、現場を数回訪れ、時には奥様を同伴したこともあった。幼年期に見た「学校町や堀の風景」を語られた記憶もある。

1983年秋、1階のコンクリート打ちを前に何度も焼き直された打込タイルの試験体ができあがった。ダークグリーンの色であった。「少し暗くないか?」との意見がかなりあった。翌年12月、建物の竣工時の天候も手伝って「外壁は暗いかな」の声がまたも聞かれた。



竣工時の全景 1985年

翌年の1985年春、外構と植栽が完了した時、雨上がりの陽光の中でオリーブ色に輝いた外壁に「何という深みのある良い色だろう」の意見が多く寄せられた。先生の色彩選定に対する奥の深さを実感させられた。

美術館の機能面では、設計の始めに新潟市の建築部営繕課・教育委員会の方々からは、塩害に対する作品保護の要請が強く出された。海岸の松の木の傾きから冬の季節風の強さと風に含まれる多量な塩分が想像できた。更に新築の公民館を案内され、窓開け換気による蛍光灯器具のサビに驚いた。塩害対策としてクイーンエリザベス号で使用されていたものと同等の塩分微粒子除去フィルターを空調機内に設置した。40年経過した現在でも、作品や展示室への塩害は生じていない。更に副産物として、微粒塵埃も除去されて40年経過した天井が、汚れていない効果も加わっている。

展示照明では展示壁面照度の均一性を求めた。他館視察や工場実験を経て、紫外線が除去された美術館用照明器具・設備で対処した。スポット照明では、初代館長の林紀一郎さんからの「作品が照明にさらされ続けるので、熱を心配している。作品保護を主体としたい」との希望で、光源の赤外線が後部の反射ミラーガラスから抜けるダイクール型器具を選定した。照明学会から照明普及賞が授与された。

1995年常設展示室の増改築工事では、前川先生亡き後、高橋義明さんの主導のもと担当者3名で設計を開始した。手狭だった常設展示室の増改築工事が行われ、大展示室、中展示室と前室で構成し、大展示室は約360㎡となり、本館最大の展示室となった。床材は企画展示室の500mm角置敷カーペットと異なるカリン材のフローリングとした。外壁はブルーを主体とした少し小ぶりの打込タイルとなった。この時まで、中庭の一つ「山の庭」には歴史の遺構として刑務所の塀を残していたが、倒壊の恐れが出てきたので今ある塀に置き換え、樹木を増やして新たに造り変えた。

美術館の機能面では、東京文化財研究所の佐野千絵先生に指南を仰いだ。常設展示室の空調は塩害対策、空調気流、温湿度など保存環境に対処した。展示照明は大型作品に対応できるように、壁面照度の均一化を追求し、空調吹出を設けた特殊器具を開発した。他には2階倉庫を収蔵庫に改修し、車輛の入る搬入口の増設を行った。

2005年の空調・照明改修工事では、竣工後20年目で空調システムの熱源・自動制御、展示照明が更新時期にあった。「これらをまとめて更新しないと日常の運営トラブルや1〜2年先の企画展示計画が非常に難しくなる」と力

説した。工事概要や休館日・工事期間を二代目館長の齊藤修さんや学芸員に提案した。当時の改修工事は「壊れかけた個所から少しずつ行う」が一般的であったが、齊藤館長は提案を前向きに受止め、率先して進めてくださった。館長室から望む公園は、20年経過した桜が満開であった。

企画展示室の照明は、Hf型美術館蛍光・色温度4,000Kに更新した。近代絵画への照度はもとより、素描、版画に対応できる低照度での演色性も高めた。展示室は柔らかな光で満たされ、展示空間は新設された様に見えた。半年後に「スコットランド国立美術館展」が行われ、記憶に残る展示空間が形成された。

空調改修では、熱源と自動制御を機能改善する更新を行い、梅雨時の展示室湿度の適正化も行った。省エネルギー化では電気・ガス・水道・下水料金の合計は約22%削減した。



スコットランド国立美術館展 2005年

改修工事の終了後は、質の高い企画展示が行われ盛況であった。2006年には「生誕100年 前川國男建築展」も開催された。前川建築の他の美術館・博物館改修計画に、新潟市美術館を参考例として取り入れたこともあった。

2009年7月、「水と土の芸術祭」で展示されていた土に藁を混練した土壁状の作品にカビが発生し、隣室の展示作品にも拡大。翌2010年2月には、展示作品にクモや昆虫30匹以上の発生が確認された。新潟市の要請で、文化財研究所の佐野先生と共に現場を視察した。展示室・空調機の損傷の物理的な回復が必須と見られ、アドバイザー業務の要請を受託し、佐野先生の助言を得て2010年3月まで行った。翌年3月には「老朽度調査」と「建物の利用に関する説明書」を提出した。これらが30年目改修工事のベースとなった。

2015年の30年目改修工事では、老朽化改修としては防水工事、雨水管内樹脂コート、展示壁面塗装、可動パネルのレール整備、受変電設備更新、常設展照明更新、警備機器更新、空調機整備、熱源整備、エアコン更新、受水槽・ポンプ類更新、トイレ更新、給排水管更新、ハロン消火設更新などを行った。

運営上の改善では、受付カウンター新設、喫茶室改善、

多目的スペース確保、講堂内装・映写音響更新、サイン更新、PC・LAN更新、荷解室の恒温恒湿空調化が行われた。常設展LED化ではLEDの欠点「人肌色の劣化」の克服のため照明反射板に赤ドットを加えた。ルノアール《団扇を持つ少女》の複製画で実験を重ね、演色性と拡散性が高まり、少女の絵が美しい輝きを放った。

2025年、今回の大規模改修工事では、打込タイル劣化部更新、コンクリート外壁塗装、外部金物塗装、シャッター・エレベーター更新、空調機・防火ダンパー更新、コンクリート内排水管の樹脂コート、ガス配管更新は、いずれも40年にして初めての工事である。タイル焼きの難しさのため、後世に残すべきタイルも確保した。展示室やエントランス・ロビーその他のLED化、火災報知設備更新、熱源・エアコン・自動制御更新は20年サイクルで2回目の更新、収蔵庫空調機は3回目の更新である。

LED化では展示照明器具の箱体は健全で、2005年の再利用に続き2度目の再利用である。LEDは15年後に照度が70%まで劣化するので、エントランス・ロビー廻りは照度調整装置を設け、適正照度の継続に配慮した。空調機は外気の塩分除去と10年毎の整備で機内腐食が進まず、長寿命化し40年目の更新となった。熱源や自動制御は3年程前から厳しい状況にあったが、延命し保存環境を保つことができた。

おわりに

はじめて美術館の敷地を訪れてから43年が経過した。荒涼としていた敷地は植栽の成長に伴い、美術館と公園の一体性が増した景観は非常に美しい。1985年の竣工から10年毎、4回の改修工事が行われ、美術館の保存機能や展示照明機能はその度に向上した。外壁タイルの40年振りの改修により耐久性も高まった。耐用年数が異なる建築・設備の各々の改修サイクルを捉えることが必須である。それにより前川先生が言われた「100年もつ美術館を造ろう」を達成することは可能と考えられる。



西大畑公園からみる美術館 2023年

新潟ゆかりの自由人 版画家谷中安規のこと

滝沢 恭司（新潟市美術館特任館長）

はじめまして。2025年4月1日に新潟市美術館の特任館長に着任しました滝沢恭司です。前職は町田市立国際版画美術館学芸員で、企画展の準備のため、新潟には十数回訪れていますが、これからは新潟の歴史、文化、美術のことなどの見聞を内側から深めていきたいと思います。どうぞ、よろしくお願いします。

さて、『WAVE』本号には、町田で展覧会を開催した新潟と縁のある版画家のことを取り上げます。

世の中には「自由人」と呼べる人がいます。どういう人をそう呼ぶか、人によって認識にズレがありそうです。『日本国語大辞典』（第二版、小学館）の説明を参照しておきます。「他の支配や拘束を受けず、自分の意志で行動できる人」とあります。一般的に言えば、大人なら自分の意志で行動するのが当たり前ですが、他の支配や拘束を受けないでという前提がつくとなると、なかなかこの定義に当てはまる人はいません。少なくとも組織に属する人は該当しません。アーティストという自営業はどうでしょう。さまざまな条件のなかで、かつ時間に追われながら活動している人が多いことを思うと、自由人と思える人はなかなかいそうありません。

昭和初期、1930年代から40年代前半に版画家として活動した谷中安規（たになかやすのり／1897－1946）は、私が知る限り、自由人と呼べる人でした。

奈良県の真言宗豊山派総本山・長谷寺の門前町で生まれ育った谷中は、東京の旧制中学を退学後、都内や千葉の知人・友人宅に居候したり、木賃宿で寝泊まりしながら暮らしました。やがて三畳一間のアパートを借りますが、眠くなれば眠り、腹が減れば生米や生にんにくを齧り、味噌をなめて空腹をしのいだといわれます。よれよれの着物で幽霊のようにふらふらと、ある時には踊りながら街中を歩き回ったということです。画料が入っても貯めることなく、衝動的にタクシーに乗ってレストランやカフェ、映画館や銭湯、郊外まで出かけて全部使い果たしてしまったようです。行き当たりばったりで、およそ生活力のない奇人でしたが、礼儀正しく、謙虚な人だったという複数の証言が残されています。また、版画家として、仕事には一心不乱に取り組んだ人でした。郷愁を誘うあるいは童画風の、独創的でモダンな木版画は当時から高く評価されていました。内田百閒や佐藤春夫、日夏耿之介ら文学者に愛され、かれらの詩集や童話に多数の挿絵も制作しています。

こうした谷中の1932年制作の作品に、少年時代の記憶をテーマとする影絵のような版画があります。8点連作の『少年画集』や《夢の国の駅》、《少年時代》などです。これらの版画には、尋常小学校時代を現在の柏崎市鯨波で過ごしたときの思い出が詰まっていると考えられます。

母を亡くした後、父が商売のために朝鮮の「京城」（現ソウル）へ渡った際、谷中少年は叔母の嫁ぎ先であった鯨波の龍泉寺にあずけられ、数年間をその地で暮らしました。この事実は、2014年開催の「鬼才の画人 谷中安規展」の準備中に、谷中作品のコレクションで知られる長岡市下塩の妙圓寺の住職、内山慶法氏を訪ねた折に拝見した、谷中が寺の住職に宛てた戦前の手紙の内容を追跡調査して明らかになったことです。その際、当時岩手県立美術館館長だった原田光さん、同館学芸員の根本亮子さんと共に鯨波の龍泉寺を訪ね、妙圓寺とのつながりを確かめるとともに、柏崎市立鯨波小学校の卒業生名簿に、谷中安規の名が筆で記載されていることも確認しました。それまでの谷中の画集や展覧会図録に掲載の、母の死直後に父とともに朝鮮に渡ったという記述を修正できたことは大きな収穫だったと思います。

発達心理学者のエリク・エリクソンは、5歳から12歳までの学童期の成長には地域や学校の影響が大きいとしています。鯨波での少年時代の体験は、版画に反映されただけでなく、自由人となる谷中安規の人間形成に少なからず影響を与えたにちがいありません。



谷中安規《少年画集 水遊び》1932年



鯨波海水浴場の河口と信越本線の陸橋風景

新たな学芸員が仲間入り

島田 浩子

HIROKO SHIMADA

新潟市美術館の一員に加えていただきました、学芸員の島田と申します。前職では栃木県足利市で廃校を利用した小さな美術館を拠点に、アーティストと展覧会やワークショップを開催するなど、美術を軸にしたまちおこしにかかわる仕事をしていました。新潟市出身ですが、地元といってもまだまだ知らないことも多く、周りからいろいろ教えてもらう毎日です。うつわの収集や庭が好きなので、新潟の窯元やギャラリー、庭園を巡って制覇したいなとわくわくしています。でもまずは美術。そして美術館のこと。4月の入職時、美術館は改修工事の真っただ中で、館のなかも外も非日常な光景が広がる状況で新生活が始まりました。落ち着かなくも、この機会だからこそじっくりとこの建築と向き合え、貴重な経験をさせてもらっています。学芸員という仕事に真摯に向き合い、学びながら、みなさまにもっともとと美術を楽しんでいただけるよう、精一杯頑張ります。これからどうぞよろしくお願いいたします！

改修中はあちこちで不思議なものが出現していました。写真は打込タイルに生じたクラック（ひび）にエポキシ樹脂と呼ばれる接着材のようなものを注入して補修する作業の様子です。器具付け～撤去・清掃まで一通りの作業で4.5日間かかるそう。



菊地 咲希

SAKI KIKUCHI

5月から新潟市美術館に配属となりました菊地咲希と申します。出身は山形県。日本海沿いを特急いなほに揺られながら、ゆっくりと新潟にまいりました。大好きな日本海の近くで、大好きな美術の仕事ができることを嬉しく思います。

さて、学芸員の仕事の一つに「作品の展示」がありますが、みなさまは気に入った作品を部屋に飾ったことがありますか？ 私は、旅先で足を運んだ美術館で購入したポストカードを額装してみたり、海で拾った石や貝殻をガラス瓶の中に入れたり……ちょっとしたもの、それでいて自分が気に入っている様々なものを部屋に飾って、ふとした時に眺めて楽しんでいます。

新潟市美術館には素敵な作品がたくさん収蔵されています。展覧会を通して、美術館に足を運んで頂いたみなさまが身のまわりに飾りたくなるような作品に出会う、そのお手伝いができれば幸いです。日々頑張ってますので、どうぞよろしくお願いいたします。

特急いなほの車窓からのぞむ日本海。引越をしてから新潟・山形間の移動が多くなったので、その度に海の写真を撮影することが一つの楽しみになっています。この日は天気が良く、船もたくさん出ていました。



開館40周年記念！ 自主企画展のご案内

ほぼせんてんてん、

2025年8月30日(土)～9月28日(日)

新潟市美術館は11ヵ月の改修工事を終え、いよいよ2025年8月30日に再開館します。休館明け最初の展覧会は、当館の所蔵品を存分にお楽しみいただける大規模コレクション展を企画しました。

1985年の開館以来、これまでに当館では5,000以上の所蔵品を収集・保存しています。「開館40周年記念 ほぼせんてんてん、」は、その中から資料とあわせて約1,000点もの所蔵品を一挙に公開するというものです。展示するのは、パブロ・ピカソやピエール・ボナールなどの名品をはじめ、新潟ゆかりの阿部展也、牛腸茂雄の作品、館内の什器・備品・展示資材・建物のカケラに至るまでの様々な「モノ」。多彩なテーマに沿って、展示室の他、館内全体を活用してご紹介します。

本年は、10月13日に当館の開館40周年を迎える記念の年です。規模も、テーマ数も新潟市美術館の歴史上これまでにない、壮大なコレクション展になること間違いありません。会期は28日間と短いので、お見逃しのないようぜひ足をお運びください。ご来場を心よりお待ちしております。

(学芸員 塚野 卓郎)



展示作品のひとつ、このたび修復を行った
パウル・クレー《ブルンのモザイク》

路傍小芸術

2026年1月24日(土)～3月22日(日)

この展覧会では、無名の人々の手によって創り出された「モノ」の数々を、あちこちの街角から集めます。いま話題の松田ベツ（長岡市）の看板に描かれた、イヌたちのまっすぐな眼差し。新潟地震（1964年）を描いた当時の子供たちによる木版画の数々。新潟市内の小中学校に残るセメント彫刻。

銭湯の壁画。古い書店の店先に飾られていた、強烈な眼光のダルマさんの絵。などなど。ひとめ見たら忘れられないような強さのあるモノ、しみじみと心に染み込むようなモノの数々です。

本来の居場所を持つことによって、かけがえのない記憶と結び付いたモノ。それらを展示室に集めることは、かりそめの、日頃はできない試みであり、当館の反省の試みでもあります。つまり、「美術館」そして「美術」とは何か・何であるべきか・何であり得るのか、と改めて、まじめに問うてみたいのです。これら路傍の「小芸術」と、美術館の白い壁との間には何があり、何が無いのでしょうか。「すべての芸術は無用である」というのは、19世紀末の作家オスカー・ワイルドの言葉ですが、そもそも有用・無用という区別は、どのように成り立つのでしょうか？

(学芸員 藤井 素彦)

